

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：14301
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2011～2012
 課題番号：23652168
 研究課題名（和文）アメリカ軍隊における「黄禍論」と人種差別
 研究課題名（英文）Racial Discrimination and the 'Yellow Peril' in the American Military
 研究代表者
 Hayashi Brian Masaru（ハヤシ ブライアン マサル）
 京都大学大学院人間・環境学研究科・教授
 研究者番号：30314165

研究成果の概要（和文）：

本プロジェクトは、1920年代から第二次世界大戦終戦にかけ、米軍（陸軍と海軍）の上層部はいかに「黄禍論」を受け止めたのかについて、一次史料の収集・分析を通じて、米軍上層部における人種差別論に着目した。今までの分析より、第二次世界大戦中、「黄禍論」は米軍上層部の戦略制定や戦術策定に与えた影響が少なかった。この分析結果は、従来的一般論として第二次世界大戦または日米間の太平洋戦争の背景に「黄禍論」が大きいといった説を反論した。

研究成果の概要（英文）：

This project is about the Yellow Peril as seen in the American military (Army and Navy) and how that idea changed over time from the 1920s to World War II. It finds that the influence of Yellow Peril thinking was minimal due in part to the changing perception of threats against national security and may not have played such a large role in the military's decision to mass intern Japanese Americans in 1942.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：西洋史

科研費の分科・細目：アメリカ史

キーワード：「黄禍論」、米軍、人種、アジア系アメリカ人、インテリジェンス

1. 研究開始当初の背景

1942年、韓国系アメリカ人の活動者 Kilsoo

Haan は、翌年、大日本帝国が必ずカリフォルニア州を侵略すると主張した。Roger

Daniels や Gary Okihiro の「黄禍論」についての研究より、海軍・陸軍インテリジェス関連者は Haan の Yellow Preal を信じるはずだった。ところが、米軍の長官たちは、Haan の主張を信じていなかった。なぜそうなったのか。報告者はその原因を探ることにし、米軍と韓国系アメリカ人の活動家の間に、「黄禍論」をめぐる、一体どのような関係を持っていたのか、を解明しようとした。

2. 研究の目的

本プロジェクト期間は2年間である。報告者は、初年度と次年度を分け、年度ごとに目的を設定した。

(1) 初年度の2011年度の研究目的は、1900～1940年代、米軍陸軍内の重要な人物がいかにして「黄禍論」を受容し、また否定したのかを検討することであった。まず、Kilsoo Haan に焦点を当てて、軍事情報部に注目し、米陸軍関係者が Haan の主張をどのように受け止めたのか、を分析する。次に、石油王 Edwin Pauley が軍需産業を支配していた民間人にも焦点を当てて、米軍陸軍に置いて「黄禍論」がいかにかに理解されたのか、を分析する。

(2) 2012年度、報告者は米軍海軍関係者が「黄禍論」をいかにかに受け止めていたのかを明らかにした。米軍海軍の日本人観に影響を与えた人物に焦点を当てた。1940年代までの間、海軍内で「黄禍論」が拡

大するとともに、それが日系アメリカ人の海軍従事の拒否、一転してスパイ組織での採用にどのような影響を与えたか、を検証した。海軍が「黄禍論」を日本の戦力を理解するためではなく、十分な軍事予算を獲得するためのレトリックとして利用した点を明らかにした。

3. 研究の方法

本プロジェクト研究方法は、関連一次史料を収集し、その史料を分析するのである。

(1) 2011年度、報告者は、米国スタンフォード大学所蔵 Stanley Hornbeck 文書を収集・分析し、Haan がいかにかに「黄禍論」に傾倒したのか、を検証した。さらに、軍需産業における民間人がいかにかにして黄禍論を利用し、戦後に放棄したのか解明するため、UCLA 所蔵 Edwin Pauley 文書も収集・分析していた。

(2) 2012年度、海軍の中心人物3人について、米国国立公文書館等の資料を収集し、分析した。まず Richmond Hobson が帝国日本の戦力を米国への脅威として認識していた背景を探った。次に、Chester Nimitz が「黄禍論」を帝国日本の脅威を理解する概念として利用していた点、そして、Ellis Zacharias が1930年代まで「黄禍論」を強く支持していなかった点についても明らかにした。さらに、改めて Haan に焦点をあて、ロサンゼルス の Salvation Army の資料から、彼の宗教的

背景と「黄禍論」の主張の関係性を検証した。

4. 研究成果

- (1) 本プロジェクトは、当初申請書に記述した目的以上に達成した。2013年度から、本プロジェクトの研究成果より新たな研究プロジェクトが始まった。
- (2) 研究計画における1930年代以前の調査については、当研究対象とする Kilsoo Haan に関する一次史料の収集に努めた。調査の過程で、彼に関する新たな史料を発見することはできなかったが、関係史料が予想以上に膨大であることも解ってきたため、今後も継続した調査が必要である。
- (3) これまで収集した一次史料に基づいた分析結果は、1920年代以降第二次世界大戦終了まで、「黄禍論」が米軍とくにインテリジェンス分野に、ほとんど影響を与えていなかったことを判明した。このプロジェクトは、歴史一次史料への徹底的な分析から得た結果が、インテリジェンス領域と人種問題の枠組みの下で、従来に大まかに記述してきた太平洋戦争や第二次世界大戦中に、アジア系アメリカ人をめぐる人種問題と異なる結論がでた。
- (4) 一方、1930年代から40年代における、関係の一次史料は、アメリカ海軍・陸軍情報局史料を中心に調査を完了することができた。この時代の史料を基に、Kilsoo

Haan の考える黄禍論がどのように形成されたのか、その背景に関する考察を行い、その成果の一部は2012年8月、アメリカ歴史学会において発表した。

- (5) 本プロジェクトの研究成果の一部である Kilsoo Haan に関する研究成果と、学会発表でのフィードバックを基に論文執筆を行い、アメリカ歴史学会誌 *Pacific Historical Review* に投稿、査読を経て掲載されることとなった。また、本年度の韓国アメリカ学会で研究成果の一部を発表することが決定した。
- (6) さらに、本プロジェクト成果の一部は、米国の大学研究者たちと共同プロジェクトを通じて、University of Hawaii Press より出版される予定である。

こうして、多国の研究者との交流ができ、英語で執筆した原稿や国際学会での発表が、日本での研究成果を国際的に発信できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- (1) Hayashi Brian Masaru "Kilsoo Haan, American Intelligence, and the Anticipated Japanese Invasion of California, 1931-1943", *Pacific Historical Review* 特集, 査読有、2014年3月、頁数未定

〔学会発表〕（計 1 件）

- (1) Hayashi Brian Masaru, “The Yellow Peril that was Neither: American Intelligence Agencies, Kilsoo Hann, and the War with Japan, 1931-1942”, Pacific Coast Branch of the American historical Association 2012 Meeting, 査読有、2012 年 8 月 11 日、San Diego, USA

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/hayashiamericanstudies/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Hayashi Brian Masaru (ハヤシ ブライ
アン マサル)

京都大学大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：30314165